慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	聖トーマスに於ける存在・真理・認識の問題：存在論的認識論への途
Sub Title	Problems of being, truth and cognition in St. Thomas
Author	有働, 勤吉(Udo, Kinkichi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1957
Jtitle	哲學 No.33 (1957. 3) ,p.47- 68
JaLC DOI	
Abstract	In philosophy, as late J. Marechal has pointed out, there would not be such problems difficult and misunderstood as those of Epistemology. Since Descartes has presented his proposition: cogito, ergo sum (I think, therefore I am), it seems to me that the most of modern thinkers, though there are nuances among them respectively, have started their philosophy from the order of self-consciousness which scholastic philosophy called intentio reflexiva, and, moreover, have reposed on it. According to St. Thomas, however, it is really impossible for human intellect to acknowledge itself before congnizing being, ens, which is extra-mental and corporeal. St. Thomas, telling that our intellect intettectus, intends being first of all; 'primum quod cadit in intellectum est ens.' expresses his ontology of cognition that cognition, first, should be the cognition of being, in another word, that of the extra-mental and corporeal world (intentio prima) and then, self-consciousness (intentio reflexiva) can be gained after the reflexion on such act of knowing being. In the first section of this treatise, I inquired St. Thomas' conception of truth and researched in what sense truth was the cause of cognition. By him, truth is properly in relation to the intellect. All the natural things are true as far as they are brought on existence by divine Intellect. God is Being Itself and cognizes Himself perfectly without containing any potency and, therefore, He is the very Truth and is first Truth, by the participation with which other intellects can cognize. Human intellect can potentially cognize every existence as it, being created, participates this first Truth. Accordingly, cognition is resulted by correspondence, that is, adaequacy between human intellect and things; this is what is defined as truth. In the second section, the distinction and the relation between cognition of quiddity and cognition by judgement, are investigated. Cognition of quiddity is the result of adaequacy between intellect and things, and cognition by judgement is that between intellect and conceptions. The former has a character of confirmation, and the intellect is not aware of the acaequacy between itself and things. The adaequacy is only recognized in the latter which has a character of understanding. And yet, as far as it concerns the order of act, cognition by judgement can not exist without the precedence of cognition of quiddity. In the third section, thomistic conception of truth is defined according to the three phases of cognition of things. Idealistic theory of knowledge not only neglecting the scholastic distinction between the first intention and the second intention, but methodologically adopting the second intention as an only intention, missed the way to extra-mental being. To know is to know being when it is said primarily, and the second intention or reflexive intention can not exist without the pre-existence of the first intention as conciousness of being. Idealistic theory of knowledge is the extremity of the second intenion which is one of two organic and indespensable intentions in ontological theory of knowledge, and so the former, in the long run, should be included in the latter.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000033-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖トーマスに於ける存在・真理・認識の問題

――存在論的認識論への途――

有働勤吉

ニコライ・ハルトマンがアリストテレス的な問題学（アポリティーク）とフッセル流の現象学（フェノメノロギー）とを方法論的に採用しつゝ、「認識は、古今の観念論の教へるように、対象の創造や産出では決してなくて、一切の認識以前に、そして認識から独立的に存在してゐるものゝ把握である。」[註1]として、その形而上学的認識観を表明して以来、現代哲学は伝統的存在論への指向を回復して、思惟からの存在の演釈、或いは意識一般に依る客観の構成を以て代表せらるゝ近世の意識論的認識論を超克する動向を示す如くなつたように思われる。

斯かる哲学史的情況に鑑みる時、アリストテレス学徒として、夙にイデアリズムと対決し、それをアリストテレス・スコラ的な存在論の中に位置づける事に依つて、ハルトマンの哲学的立場を先取してゐる聖トーマス・アクイナスの存在論的認識観[註2]を解明することは時宜を得た、又有益な試図であると言つても決して過言ではない。[補註1]

とは言つても、神に於ける認識、純粋精神たる天使にあつての認識、人間に於ける認識といつた、豊かな智性主義（インテレクチュアリズム）の基盤の上に展開されるトーマス的認識観の全貌を此処で解明し、体系化しようと目論むものでは決してない。

本小論は、トーマスと共に事物認識に存在・真理・認識の三段階を区別する視点に立つて、如何なる意味で認識が

真理の結果であるのかを究明し、存在論的認識論への予備的考察たらんと志すものである。

註1　N. Hartmann: Grundzüge einer Metaphysik der Erkenntnis, 2 Auf., Einleitung.

註2　トーマスとハルトマンの存在論的認識観の共通点、相違点に就いては、「トーマス、ハルトマンに於ける認識論的思想の対比」なる拙論（修士論文）に於いて考究する所があつたが、他方トーマス的認識観に則り、これを復興すべく力のあつた思想家として、E. Gilson, J. Maritain, J. Maréchal 等のネオ・トミストを挙げる事が出来る。

1

聖トーマスに依れば、真理 verum, veritas は、常に智性への関係によつて言われる。即ち、欲求がそれに向うところの存在が善と言われるように、智性がそれに志向するところの存在が真と言われる。

ところで、認識された事物 res と智性 intellectus との間には、二様の関係が存する。その第一は、事物が智性に per se に（必然的に）関係する場合であつて、かゝる時、認識された事物は、その esse（存在する事の働き＝実存）を智性から得ている。聖トーマスの用例に従えば、家は大工の智性に per se に関係すると言われる。

その第二は、家が、それを構図した大工の智性以外の智性に対するように、事物がその産出に関して依存しない智性に対しては、per accidens に（偶然的に）関係すると言われる。又トーマスに依れば、一切の事物は、それが依存するところの智性に対する関係によつて絶対的に真である。従つて、人工物は、人間智性への関係に於いて真理が言われる事になる。同様にして、自然的事物 res naturalis は、創造的智性への関係によつて、即ち神的智性の中に先在する形相の似姿に従う限りに於いて、per se に真であると言われる。

これに対して、事物は、それが依存しない智性に関する限り、per accidens に真である事が出来るのであつて、自

然的事物は、それから知識を受取る人間智性に依つて合致させられる限りに於いて偶然的に真であると言われる。(註1)

以上、真理が常に智性への関係に於いて言われる事を述べたのであるが、この智性 intellectus なる概念は、トーマスに於いては、決して forma separabilis なる人間智性に限局されざる態のものであるという特色を有する。智性とその認識作用とは、本質に関しては、如何なる合成も存せざるところの forma separata なる叡智体 intelligentia にも、更には、一切の可能態の混入を超絶する actus purus なる神にも、類比的に共通する概念なのである。(註2)

さて前述の所から、真理が智性に関して言われる事は明らかであるが、他方真理は又事物の側からも言われ得る。即ち人が真なる友人と呼ばるべく必須の条件を具有する際、その人は「真なる友人」と言われる場合がそれである。即ちそこには真理のアナロジアがある。(註3)

処で或物が、多くのものに就いて類比的に述語される場合、前記の或物は、爾余のものがそれに依つて然か命名されるところの多くのもののうちの一つに於てのみ、本質的に見出される。例えば身体、尿、薬について健康性という事が言われるけれども、薬は健康を結果し、尿は健康を表わし得る限りで健康であると言われるのであつて、健康性が本来的に言われるのは、健康性の理拠が初めに見出されるところの身体に於てゞある。

従つて、真理が多くのものに就いて類比的に言われる場合、第一に、真理の完全な理拠が見出される一つのものについて言われなくてはならぬ。(註4) トーマスは、斯かる真理の完全なる理拠を創造的智性の中に見出すのである。

従つて、真理は、丁度健康性が本来的に身体について言われるように、本来的な意味で且つ第一義的に、神的智性への関聯に於いて言われる。而して、本来的な意味で且つ第二義的に、人間智性への関係に於いて真理が言われる。これに対して事物は、前述の二つの智性に関係するのでなくては真と言われる事が出来ない。従つて、非本来的な意

味で且つ第二義的にしか、真理は事物の中に存在しない事になる。(註5)

真理の完全な理拠である創造的智性の中なる真理について、トーマスは更に語り続ける。神に於いて、その esse と intellectus は合致して居り、又神は自己自らを知るものであつて、自己を知るものは又凡ての他の実存、総ての他の智性の尺度 mensura であり、原因である。esse と intellectus の間に完全な同一性が存するところの神は、存在論的、乃至は形相的「真理」veritas そのものであり、「真理」veritas そのものであるが故に、第一の「真理」prima veritas である。斯くして神に於いては、智性の真理 veritas intellectus と事物の真理 veritas rei の完全なる契合が存し、それは爾余のすべての存在論的或は形相的真理の源泉である。然し乍ら吾々は、彼が同じ章で、神に於ける真理が否定的肯定或は類比によつてしか言われないとして、次の様に述べている事に注意する必要がある。

「けれども、仮令吾々が本質的な意味で言われた真理について語るとしても、それは丁度父は自からに依つて在る、他に依つて在らざるが故にと言われる時のように、肯定が否定に分解されて、初めてその真理が理解され得る。而して同様にして、神の実存がその智性と違わないという限りで、神の真理は始源的似姿であると言われ得る」。

Sed, si de veritate essentialiter dicta loquamur, non potest intelligi, nisi resolvatur affirmativa in negativam, sicut cum dicitur, *pater est a se, quia non est ab alio*. Et similiter dici potest *similitudo principii* veritas divina, inquantum esse suum non est suo intellectui dissimile. (S. Th., 1, Q., 16, a., 5, ad. 2).

存在論的或は形相的全真理は、完全な智性なる第一真理から由来する。不完全なる被造的智性は、創造という事実によつて、智性の完全なる段階者なる第一真理への不十分乍ら不滅の関与を有している。離存形相たる天使に於ける形相の内在、即ち可知的なるものの本性的所有は、この関与に依る結果であろうし、可離的形相たる人間に於ける能

動的智性力の原理的所有、可知的なるものへの志向も、完全智性えの関与 participatio に依つて始めて説明され得る事なのである。一切の形而上学的肯定は、単に道徳的或は実践的必然性許りでなく、厳正な理論的必然性を具有する必要がある。トーマス的形而上学が、アリストテレスとプラトン、聖アウグスチヌスの歴史的総合として、人間存在の essentia に関する又 existentia に関する二重の可能態なる偶存有の事実から de facto 出立して、殊に実存(エクズイステンツィア)に関する因果律的思惟によつて、下からの「存在の類比」analogia entis を洞察、爾余一切の存在がそこから実存を得べき、何等の可能態も混入せざる esse 即 essentia なる純粋現実態 actus purus が必存すべき事を理論的に確然として肯定する事に依つて、実践的必然性の前に理論的必然性の要求を充足している事に刮目せざるを得ない。然からば斯かる形而上学的背景の理解の下に、被造的な、従つて不完全な智性、別して人間智性に於ける真理如何の問題を考察してみよう。

「第一真理とは、それに依つて精神が一切のものを判断する真理であつて、この真理から事物の生得的形相が天使的智性に注入され、それに依つて天使は一切のものを認識するのであるが、同様にして、一切のものをそれによつて吾々が判断するところの第一原理の真理が、神的智性の真理から人間智性に範型的に現われる。もし第一真理の似姿がないならば、吾々は第一原理の真理によつて判断する事が不可能だからして、従つて吾々は、第一真理に依つてすべての物を判断すると言われるのである」と、トーマスは述べている。

Veritas secundum quam anima de omnibus iudicat, est veritas prima. Sicut enim a veritate intellectus divini effluunt in intellectum angelicum species rerum innatae, secundum quas omnia cognoscit; ita a veritate intellectus divini exemplariter procedit in intellectu nostrum veritas primorum principiorum

secundum quam de omnibus iudicamus. Et quia per eam iudicare non possmus nisi secundum quod est similitudo primae veritatis, ideo secundum primam veritatem de omnibus decimur iudicare. (De Veri., 1, Q., 1, a., 4, ad., 5.)

離存形相たる天使的智性は、創造的智性から注入せられた個有的形相によつて一切を一気に認識する。即ち其処には直観的認識 ratio intuitiva が存する。

感覚に於けるような或る身体的器官の働きでもなく、さりとて質料との合成なき叡智体でもなく、両者の中間に位置する身体的質料に結合された認識能力として形而上学的に規定せられる人間的智性にあつては、それが生得的智的形相 species innatae を持たぬにも拘わらず、その本性的活動に於ける所謂先行的法則として、換言するならば、事物の推理的認識 ratio discursiva の先天的な条件 conditio a apriori として、第一真理への関与が示されなくてはならない。天使の場合、第一真理は先天的作用的なるものとしてその智性に接合したのであるが、人間智性の場合、species innatae が注入される代りに、先づ精神の外に extra animam 質料的対象が与へられているのである。

本性上可知的なるものを欠如的にしか所有していない滑らかな板 tabla rasa の如き人間智性は、この可能態に於てのみ可知的なる事物に、恰も目的に向うが如くに志向し、それから可知的なるものの配分を受ける。即ち事物から知識を受取るのである。トーマスに依れば、吾々の智性はそこから知識を受取るところの智性の原理たる事物に合致する限り真であり、他方事物は、その原理たる神的智性に合される事に依つて真なのである。(註6) 従つて吾々智性の真理は、人間智性が神的智性によつて内的に—能動的、可能的な智性的能力として創造されたという意味で—計られると同時に、外的に—吾々の智性は自然的事物に依つて計られるが、他方この同一事物が神的智性に依つて計られるとい

う意味で二計られるという風に、二重に計られる事に依つて結果されるところの真理である。ところで神の esse と intellectus との間には完全な同一性が存するからして、神は又完全、最高の意味で自己を認識するものである。この意味に於て、真理そのものが神の智性に於いて見出されたのであつたが、人間認識にあつては、その客観的存在論的条件たる事物も、主観的存在論的条件としての智性も、倶に真理そのものたる神への関与に於いて存在にまで齎らされたのであつて、神に於ける完全なる自己認識は、其処では事物の認識即ち対象認識を通しての自己認識にまで間接化されて居り、その一致として真理が言われ得るのである。

以上で無限智性なる神の中にのみ、完全な且つ本来的意味での真理そのものが存し、爾余の真理は、それが有限的智性に於てゞあれ、事物に於いてゞあれ、すべて第一真理としての神への関与に於いてのみ言われ得る事が述べられたのであるが、然らばトーマスは如何なる意味合いで真理が認識の原因である veritas est causa cognitionis と言うのであろうか。

トーマスの哲学的立場が「存在する限りの存在」を取扱う存在論的立場である以上、アントロポローギッシュな性格を有する近世哲学がそうであつたように、彼は認識を人間智性の専有的作用に帰していない。

トーマスでは、存在の非質料性 immaterialitas は、それの認識能力の段階を決定づける。即ち非質料性の段階に応じて認識の段階が存するわけである。形相と質料との如何なる合成も存せず、唯本質と実存との合成のみがある所の純粋精神的存在は、従つてその認識の働きに於いて如何なる質料的なるものへの依存もない。これに対して人間は、形相と質料とを包括する智性であるからして、その認識能力は働きに於いて質料的なるもの即ち肉体に制約される。感覚は、質料なしに、しかし質料的条件と共に形相を受容する事が出来るからして、可認識的であると言われる。

さて人間は本性上知る事を欲する。(註7) 智性に第一に落ち来るものは存在であつて、欲求が善に向うが如くに智性は存在なる真を志向する。アウグスチヌスはこの意味で、verum nominat id in quod intellectus intendit と言つている。ところで認識は識られたるものが認識者の中に内在する事によつて成立する。即ち認識は識られる対象とその対象の智性内在を前提して初めて可能となる。従つて吾々の智性の真理 veritas intellectus の理拠は、それが志向し計られる所の事物の側に帰されなくてはならない。この事は、然しだからと言つて、智性の真理が事物の真理から由来するとゆうのではない。健康性の理拠が身体に於いてよりも薬の中に第一義的に見出される事がない様に、吾々の智性の真理が言われる為には、事物の真理ではなくて事物が在る事 entitas が必要なのであつて、事物の esse が智性の真理を生ずる。トーマスはアリストテレスに従つて、事物が真である事に依つてではなく、事物が在る事によつて見解や言葉が真なのであると言つている。(註8) 実に真理は存在から不可分離的である。即ち真理は存在間の対応関係 correspondentia である。それでは次に、存在・真理・認識の関係の考察に関するトーマスの原文に接してみよう。彼は其処で吾々の事物の認識が如何にして成立するかを叙述し乍ら、真理を存在と認識に関聯せしめつつ、存在論的認識論の視点から真理規定を示している。

「一切の認識は識られたる事物（認識対象）に対する認識者の同化によつて成就される。同化は丁度視覚が色の形像に素質づけられている事によつて色を認識すると言つた意味で、認識の原因なのである。故に智性に対する存在の第一の関係は、存在が智性に対応しているという関係である。「トーマスは別の箇所 (S. Th., 1, Q, 16, a., 3, c.) で、すべてのものは可認識的である限りに於いて存在するものであると、存在と智性の関係を説明している」実にこの対応が事物と智性の適合と言われる。而してこの対応に於いて真理の理拠(ラチオ)が本質的に完成される。故にこの事は、存在に

真を付け加へる事即ち事物と智性の合致或は適合を存在に付加する事なのである。上述のように、事物の認識はある一致に従うものであるからして、この意味に於いて事物の存在性は真理の理拠に先行するが、しかし認識は真理の或る結果である。」

Omnis autem cognitio perficitur per assimilationem cognoscentis ad rem cognitam, ita quod assimilatio dicta est causa cognitionis: sicut visus per hoc quod disponitur per speciem coloris, cognoscit colorem.

Prima ergo comparatio entis ad intellectum est ut ens intellectui correspondeat: quae quidem correspondentia, adaequatio rei et intellectus dicitur; et in hoc formaliter ratio veri perficitur. Hoc est ergo quod addit verum supra ens, scilicet conformitatem, sive adaequationem rei et intellectus; ad quam conformitatem, ut dictum est, sequitur cognitio rei. Sic ergo entitas rei praecedit rationem veritatis, sed cognitio est quidam veritatis effectus. (De Veri., 1, Q., 1, a., 1, c.)

吾々は此処に引用した原文を次の三項目に要約する事が出来る。

1. 存在論的に位置づけられた智性と事物
2. 智性と事物間の確証せられる認識存在論的同化或は一致としての真理
3. 一致としての真理の結果—認識

この三項目は又同時に、認識が存在・真理を先行的要件(シネクワノン)として論理的に前提して初めて可能となるという事物認識の達成への三段階を指示している。従つて如何なる意味に於て真理が認識の原因であるかを考察する事は、実は、存在に依つてその理拠を先取されているところの真理は如何にして認識の原因であるのかを考究する事なのである。吾

々は先づ「真理は事物と智性の合致である」veritas est conformitas rei et intellectus の立言的論拠を仔細に検討する事に依つて、事物認識の達成を準備しなくてはならない。

res とは、先づ十個の範疇に依つて区別される様式的存在即ち本質（エッセンチア）と理解する事が出来る。事物は智性とは別なる他者としての他者 aliud ut aliud である。即ち客観的に考へられた対象である。他方智性は或る意味で一切のものとなるところの、認識する働きとしての ut congnoscens 精神の意味である。主観的に考えられた認識作用者である。この精神外在的事物 res extra animam が如何にして智性に内在して識られたるものとなるのだろうか。認識は識られる事物に知るものとしての智性を一致せしめて初めて可能となると云われるのであるが、その認識の原因としての認識存在論的一致或は適合は如何にして可能であろうか。（註9）

さてアリストテレスに於けると同様トーマスも、すべての存在を質料的存在と非質料的存在の二つに分つ。質料的存在はその質料性の故に認識せず、その本性以外の何物でもない。この木はこの木であつて、それ以上の何物でもない。これに反して非質料的存在は、非質料性が可認識性の根拠であるからして、豊富にして且つ或る意味で無限なるものである。霊魂は自らの本性に止まらず或る意味で他のすべてのものである。（註10）即ち質料的存在は自らのあるがまゝなる本性に止まり、非質料的なる智性は自らの本性的形相の外に他者としての他の事物の形相に与かる、というのが夫々の本質であるという事である。

「すべての事物は、それが本性の個有的形相を有する事に依つて真である。換言すれば、一切の存在はその実体性に依つて真と置換され得る。ところで認識を具へた事物である限りの智性は、その智性の形相である所の認識せられたる事物の似姿を持つ限り真である」（註11）と言われる所以である。

他者としての他の事物の形相に参画するとは如何なる事を意味するのであろうか。吾々が木や石をみる時木石そのものになるのであろうか。もしパルメニデスの「認識と認識対象とは同一である」ταὐτὸν δ' ἐστὶ νοεῖν τε καὶ οὕνεκεν ἔστι νόημα の立場を是とするならば、智性が質料的に木や石なる事物になる事となる。これは不都合である。何となれば、自らの本性的形相の外に、更にアポステリオリに木や石の本性的形相を持つことは不可能である。しかしもしパルメニデスの言う同一性を否定せんか、其処には識るものと識らるるものとの間の架橋は断ち切られ、と同時に認識の可能性も失われてしまう。認識と認識されるものの同一性は実に認識の可能性の試金石である。トーマスが適合或は一致 adaequatio sive conformitas と言うも、畢竟依つて以て認識が結果せられる智性・事物間の形相的同一性なのである。アリストテレスと共にトーマスがパルメニデスの提言の検討に際して苦心した点は、この形相的同一性 conformitas という一点でもあろう。私は先に、認識対象としての事物 res が十個のカテゴリアによつて区別される存在の様式 modi essendi である事に触れて置いたが、それは secundum se et non quoad nos に吾々の精神の外にこの石、あの木として質料との合成に於いて存在している。この事物を事実それが在るとはちがつて在ると理解するとすれば、それは偽である。しかし理解する方の側から別の仕方で事物が受入れられたとするならば、これは虚偽とは言われ得ない。事物の存在する事の様式と理解する際の理解の様式 modi intelligendi が異なつているという事は虚偽とは考へられないからである。理解する様式とは非質料化の様式であつて、質料と合成した形相 forma impressa は理解の際にその質料から切り離されて智性の中に自存する形相 (forma expressa) となるのである。従つて事物が存在の様式に於いて有する存在論的 secundum se et non quoad nos なる性格は存在論・認識論的な性格 secundum se et quoad nos に於いて悟性様式へと移されるのである。併し secundum se なる性格に

よつて modi essendi から modi intelligendi への移行に於いて、形相的同一性は依然維持されている。この事に於いて智性は事物と一つになる。形相的同一性は、パルメニデス的な認識されるものが本質的に真でなくてはならないという思惟と実在との同一性の要求を満足させている。こゝに注意すべき事は、認識するものと認識されるものゝ同一性は、識られるものが常に真でなくてはならないという事に外ならないが、かゝる論理的必然性以前に存在論的な智性の存在への対応 correspondentia が存するという事である。智性に到来する最初のものは存在である。primum quoad cadit in intellectum est ens (De Veri., 1, Q., 1, a., 1, c.) 従つて通常論理的真理 veritas logica と解されている veritas est adaequatio rei et intellectus は智性の真理である以前に事物と智性との本性の洞察に基づく形而上学的対応を言表している形而上学的真理(補註2) veritas metaphysica として理解さるべきではなかろうか。

註1　S. Th., 1, Q., 16, a., 1, c.
　　De Veri., 1, Q.,1, a., 2, c.
註2　S. Th., 1, Q., 87, a., 1, c.
註3　S. Th., 1, Q., 16, a., 6, c.
註4　De Veri., 1, Q., 1 a., 2, c.
註5　De Veri., 1, Q., 1, a., 4, c.
註6　S. Th., 1, Q., 16, a., 5, ad. 2.
　　De Veri., 1, Q., a., 2, c.
註7　*Πάντες ἄνθρωποι τοῦ εἰδέναι ὀρέγονται φύσει*
註8　S. Th., 1, Q., 16, a., 1, ad. 3.
註9　De Veri., 1, Q., 1, a., 1, c.

註10　S. Th., 1, Q., 14, a., 1, c.
註11　S. Th., 1, Q., 16, a., 2, c.

2

再三指摘したように、真理は智性の中に在るのだが他方トーマスは、人間智性に二つの働きを区別する。その一つは精神外在的本質 essentia に志向し、何であるか(キディタス)を構成する働で、此時智性は本質構成的智性 intellectus formans quidditates と呼ばれる。この智性の対象は ens per se であつて、此本質と此智性との関係は、スコラで第一志向 intentio prima と言われる。この関係に於いて、事物と智性の合致が概念認識 cognitio notionis を結果する。ところでこの智性は、自分が存在と合致してゐる関係を認識する事がない。感覚が物体的質料の内なる形相にひたすら志向すると同様、本質構成的智性はその個有的対象たる ens per se にのみ向うからである。したがつて、本質構成的智性の中には智性と事物の合致としての真理が存在論的な意味で在る。トーマスが、何であるかを認識する智性の中には、感覚に於けると同様真理があると言つてゐるのは此の意味に於いてである。

ところで智性は又合成し、分割する働きに依つて、合成的・分割的智性 intellectus componens et dividens である。この智性は概念 notio, conceptio を合成し分割するもので、判断する智性とも呼ばれる。この智性と概念との関係がスコラで言う第二志向 intentio secunda であつて、こゝに判断的認識 cognitio iudicii が成り立つ。

さて本質構成的智性にあつては、智性と事物との合致が事実として在る。これに対して合成的分割的智性は、すべての命題に於いて述語に依つて言い表わされるある形相を、主語に依つて意味される或る事物に附加へたり切離した

りする、即ち肯定したり否定したりするものである以上、主語に依つて表示される存在と、述語に依つて意味される或る形相とを結合する事に依つて、智性自らが可知的事物に合致する関係を認識し、定義に依つて言い表すことが出来る。故に判断的智性の中には、把握され、認識された真理がある。併しこの認識された真理は、第一志向に於ける事物と智性との存在論的な合致を前提することなくしては不可能である。蓋し判断とは、存在と智性「本質構成的智性」の合致の結果である概念に就いて判断する事であり、その任意的結合、分割を為すものであつて、その判断が外なる事象に合致する時それの真理が言われるからである。私が第一章の最后の所で、事物と智性との合致としての真理 veritas ut conformitas rei et intellectus が判断の真理である以前に形而上学的真理であるのではなかろうかと言つたのはかかる意味合いに於いてであつた。

にもかゝわらずトーマスに依れば「真理はそれが本来的に言われる場合、合成し分割する智性の中にあり、何であるかを認識する智性の中にも感覚の中にもない」Et ideo, proprie loquendo veritas est in intellectu componente et dividente non autem in sensu, neque in intellectu cognoscente quod quid est. (De Veri., 1, Q., 16, a., 2, c.) と言われる。思うに本質認識的智性は、理解されたる名辭が由来する始源にのみ関係する。即ちその智性は、外的対象に一致した状態にあると言う意味で確証 constatation の性格を有する。併し智性は、それが判断する時、事物から抽象された形相が在ると同じ仕方で事物が存在することを言ひ表わす。従つて判断的智性は、対象を対象として認識するのである。そこに判断に於ける主観的な理解 comprendre の性格を指摘する事が出来よう。然らば何故判断に於いて第一に真理の関係が見出されるのかをトーマス自身に聴いてみよう。

「……智性が精神の外なる事物が持つて居ないが併しその事物に対応するところの個有なる或物を第一に持ち始め

る処に、真理の関係が第一に見出される。」と読まれる。本質構成的智性にあつては、唯対象との必然的な部分的な一致のみが存した。之に引き換え判断的智性には、事物と本質同一的な概念についての合成と分割がある、この合成と分割とは、智性（判断的）の中にのみ在つて、事物の中には存在しない種類のものである。この合成、分割は人為的なもの、任意的なものである以上、本質認識の場合のように per se でなく、per accidens であり、したがつてそれは外的事象に一致することもしないことも出来る。判断的智性は概念を要素とする限り、斯様に本来的と言われる真理が内属すると同時に、虚偽(註1)への原理的な可能性も又見出される。従つて、トーマスが本来的な真理は合成的分割的智性に於いて見出されると云うのは、そこに於て真理が把持され認識されるからである。真理は単なる事実としてでなく、識られたる事実として智性の光を受けるのである。言い換えるならば、そこに於いて真理は、概念認識の意識されざる状態から意識に対する状態にまで高められたのである。

以上要するに、一切の結論的認識は知識 scientia と呼ばれるが、これは合成・分割的智性の中にある。認識せられたる真理は、とりもなほさず知識としての真理であり、この種の真理の出現なくして吾々は概念認識の原因としての事物と智性の合致＝真理を推理的に命名することは出来ない。認識されざる事実としての合致の真理は、その存在に関して secundum esse は、認識された真理よりも先 a priori であるが、それが識られる事に関して secundum intentionem は、知識としての真理より後 a posteriori である。こゝに注意すべきは、トーマスが、識られたる真理を本来的な意味での真理と定義する時、彼は智性の完全なる段階である神の智性の中の真理を念頭に置いているのである。併し吾々の不完全なる智性にあつては、神に於けるが如き完全なる自己認識は存しないが故に、対象認識を通して始めて反省的に自己が認識される。従つて不完全に、しかも不充分に imperfecte et inchoative ではあるが、

存在論的に確として在る合致の真理（感覚・ens per se の要素的・概念的把握である単純把握に於けるような）の前提の上にのみ真理が認識に迄高められる。[註2] 後者は前者に存在論的に依存し、認識論的にそれを補足するものとして考うべきであろう。

註1　虚偽は真理の反対概念であつて、真理の理拠と同様、合成・分割的智性の中に見出される、とトーマスは彼の（S. Th., 1, Q., 17）虚偽論の中で述べて居るが、彼の真理論が虚偽論に裏打されてゐることが、その真価を一層高からしめてゐることに留意すべきである。

註2　次のトーマスの文章は、第二志向或は反省的志向がなければ第一志向もないと言う近世主義を前時代的に批判するものである。「第一に若し真理の理拠が存在の把握に伴わないとすれば、存在は把握されないと言うわけである。この言ひ廻しは本当である。第二に若し真理の理拠が把握されなかつたなら存在は把捉されていないだろうと考えられよう。しかしこれは誤りである。」Uno modo, ita quod non apprehendatur ens, nisi ratio veri assequatur apprehensionem entis. Et sic locutio habet veritatem. Alio modo posset sic intelligi, quod ens non posset apprehendi, nisi apprehenderetur ratio veri. Et hoc falsum est. (S. Th., 1, Q., 16, a., 3, ad., 3.)

3

存在・合致・認識という実在認識の三段階は、同時に真理の階程でもある。本章では神的智性によつて実存に関して、又事物によつて本質＝可認識性に関して夫々計られる事に於いて言われる事物の真理、人間智性の真理、又一切の存在論的、形相的真理に範型的な適合の真理が述べられる。トーマスは、先づ事物の真理に就いて次の様に言う。

人間智性の真理は事物から結果されるが、それだからと言つて事物の中に真理の理拠が第一に見出されるのではな

い。事物の真理ではなくて事物の存在 esse が智性の真理を生ずるのである、とアリストテレスと共に語つている。(註1) けれども前述の通りトーマスは、智性と事物間に必然的 per se 偶然的 per accidens という二様の関係を規定している。自然的事物は、それから知識を受取るところの人間智性に関する限りそれと偶然的に関係するにすぎず、その両者の合致即ち真理は事物にとつては偶然的真理である。然し人工物は工人のイデーに依つて計られ存在にまで齎されるからして工人の智性に必然的に関係しその絶対的真が言われると同様、自然的事物は人間智性を計りながら他方、創造的智性にその esse に関して依存している事に依つて外的に計られている。即ち事物は創造的智性への関係に於いて絶対的真理をもつ。トーマスが「真」の理拠は智性から事物に帰されることが必要だと言う時、(註2) 創造的智性への外的関聯によつて絶対的に真理をもつ事物に人間智性の真が帰せらるべき事を言つているのである。彼がアウグスチヌスに従つて「真なるものは在る所のものである」verum est id quod est と定義する当の真は、事物の真理 veritas rei を意味している。アリストテレスが真 ἀληθές は事実 πρᾶγμα の中にではなくて智性 διάνοια の中にあると言う時、彼は事物を人間智性への偶然的関係に於て見ており、かゝる事は不都合であつて事物は神的智性への関係に於いて真を有する事にまで想倒すべきだとトーマスは述べてゐる。従つてトーマス的な事物の真理の概念には、アリストテレス・アウグスチヌス的真理の歴史的綜合がある。

他方トーマスは、アリストテレスと共に真理が本来的に智性の中に存する事を肯定する。此の意味で彼はまたアウグスチヌスに従つて「真理とは、それによつて存在する所のものが開示されるものである。」veritas est, qua ostenditur id quod est. (De Veri., 1, Q., 1, a., 1, c.) とも、また「真理とは吾々がそれに依つて、より劣れるものに就いて判断する所のものである。」veritas est secundum quam de inferioribus iudicamus (ibid.) とも智性の真理に

就いて語つてゐるが、両者は明らかに異つてゐる。即ち前者は概念認識の原因としての真理について、後者は判断認識の原因としての真理に関して述べてゐるのであつて、此等二つの智性の真理の区別は前章で考察した通りである。

以上事物の真理と人間智性の真理に関するトーマス的概念を解明し来つたのであるが、彼がその立言的功績をイサク Isaac に帰してゐる「併し此の適合の真理がイサクの定義書の何処にも見出されないとトーマス研究者達は報じてゐる。」事物と智性の適合としての真理 veritas ut adaequatio rei et intellectus が、事物の真理にも、人間智性の真理にも、又一切の存在論的、形相的真理がそれから真を分与される神の範型的真理にも妥当する所の形而上学的真理である事は先述した通りである。

註1　S. Th., 1, Q., 16, a., 1, ad., 3.

註2　S. Th., 1, Q., 16, a., 1, c.

§　§　§

意識論的認識論は、それが懐疑 doute を方法とするものであれ、或いは批判 Kritik を方法とするものであれ、何れも、思惟するもの res cogitans の或いは理性 Vernunft の自覚的意識、即ち第二志向乃至反省的志向から出立して、其処から客観的認識、即ち第一志向の成立を演釈せんとする理説であるように思われる。

却説、トーマスが「もし真理の理拠が存在の把握に伴わないとすれば、存在は把握されないという訳である。此の言い廻しは本当である。又もし真理の理拠が把握されなかつたならば、存在は把握されていないだろうと考えられよう。しかしこれは誤りである。」(註1) と書いていることは先に述べたが、吾々は又、それと同一内容の主張を、次の彼の文章中に見出すことが出来る。即ち「存在の理拠を知る人はすべて、真理の理拠を知つている必要はない。それは丁

度、存在を知る誰でもが、必ずしも能動智性を知るとは限らないようなものである。しかし、能動智性なくしては、人は何ものも知ることは出来ない。(註2)」

右の二引用文に於いてトーマスが言わんと欲するところは、次の様に言い換えられる事が出来よう。

先づ第一に、存在と本質構成的智性との適合 adaequatio としての第一志向（存在の意識）が、この適合の認識、換言すれば、概念と合成・分割的智性との関係に於いて成立する第二志向（意識の意識）から厳密に区別されなくてはならないということである。第二に、存在と本質構成的智性との存在論的適合に依つて成り立つところの第一志向は、この適合の意識である認識論的な第二志向乃至反省的志向に何等制約される事なく存立するという一事である。第三に、認識とは、第一義的に存在の認識であつて、その結果獲得された概念の認識ではない。従つて能動智性即ち知りつゝある意識の存在こそが認識の必須要件（シネクワノン）なのである。蓋し、認識とは事物たる対象存在と智性たる意識存在との存在論的適合の結果に外ならないからである。

此処で留意さるべきことは、意識論的認識論者と全く同じ意味合いに於いてゞはないが、トーマスも又自己認識をば、人間智性の完成態として容認しているという事である。しかし、トーマスにあつては、アリストテレスと同様、人間智性は、決して一気にそして直接的に自己を認識するものではない。此処にトーマスの人間性の本質に就いての鋭い洞察がある。人間智性は、それが身体的器官即ち感覚と本性上結合しているものだからして、感覚を超えた非質料的なるものを直接には認識し得ず、わずかに感覚的なるもの、質料的なるものから類比に依つてそれを認識し得るに過ぎない。人間智性が純粋現実態なる神に就いて語る時でさへも、感覚の言葉即ち物質の言葉で語つているのである。トーマスに依れば感覚的認識は、云わば智性的認識の原因の質料であり、(註3)人間智性は、構想力に依らずしては、

何物も現実態に於いて認識する事は不可能である。(註4) 智性の中に在るもので、嘗つて感覚の中になかつたものはなく、又何等かの適合の認識は、存在と智性の存在論的適合なしには在り得ないとするのがアリストテリコ・トマス的な認識観の基調である。従つて智性にとつて本来的な自己認識も、こと人間智性に関する限り、質料的対象の認識を通してゞなくては達成されない。「人間智性は、理解することの様式 modi intelligendi として認識に関しては可能態に於てあり、認識された事物のスペチエス即ち本質＝存在することの様式 modi essendi に依つて現実態にされた後、恰も自分自身の本質に依つての如くに、事物の本質に依つて自己を認識する。(註5)」と言われる所以である。

意識論的認識論は、第一志向と第二志向乃至反省的志向とのスコラ的峻別を顧慮しなかつたのみならず、判断である第二志向乃至反省的志向から出立して、それに憩つてしまい、判断の要素としての概念の存在論的性格を看過した結果、意識論的認識論者等に於て、観念は存在の単なる表象に止まり、概念又感覚的所与に当嵌められる空虚なる形式に堕してしまつた。従つてトーマスに於けるような存在と概念内容との本質的同一性は最早や維持されなくなり、思惟或は理性に依る実在の直接的把握或は物自体の把捉を断念せざるを得なかつたのではあるまいか。

トーマスは、その研究者達に依つて指摘されるように、(註6) 彼自身、認識論を体系的に設問する事はなかつたにもせよ、実存と現実有・論理有とを裁然と区別し、形而上学的真理の結果である人間認識に於ける感覚的認識と智性的認識の本性的一体性、或いは第一志向と第二志向が区別を保持しつゝも齎合的であること等、存在論的基盤に立つた認識観をその著作の随所に展開して居る。斯かる認識観は、意識論的認識観が論理有から現実有を演釈するとゆう意味でそれの極性化であり、その中に位置づけられる事が哲学史的必然であるところの存在論的認識論えの方向を初動的に内含的に指示するものである。

註1　第二章註2参照

註2　De Veri., 1, Q., 1, a., 1, ad. 3.

註3　S. Th., 1, Q., 84, a., 6, c.　トーマス哲学は存在論であるが、これを以て直ちにトーマスに於いて人間智性が存在よりも低からしめられてゐると速断するのは不当である。類概念・種概念は、感覚が精神外在的個別者を同一本質的に受容して得られる可感的形相 species sensibilis から能動智性 intellectus agens が抽象する事によつて得られるものなのである。此の意味で感覚的認識は、云わば智性的認識の原因の質料であると言われるのであつて、此のトーマス的認識観は物質的土台がイデオロギーの究極的原因であるとするマルキシズム認識観とは区別されなくてはならぬ。

註4　Ibid., a., 7.

註5　Ibid., Q., 87, a., 1, ad. 3.

註6　R. P. Phillips: Modern Thomistic Philosophy, Introduction. G. V. Riet: L'Épistémologie Thomiste, Avant-Propos

補註1

蓋し、今日の哲学の如き観ある実存哲学或いは実存主義といつたものは、フッセル流の現象学に対する研究を俟つて、始めてその歴史的にして適確な理解が得られるでもあろうし、更にはボルツアーノ、殊にブレンターノに於けるスコラ的志向 intentio の教養が、フッセル現象学に決定的な影響を及ぼしてゐることに想到するならば、アリストテリコ・トーマス的な存在論的認識観の考究は、現象学、ひいては実存哲学のより根源的理解を齎らすものとして期待されるからである。

補註2

人間智性と事物との形相的同一性は、云わば可認識的なる本質に関するものであるが、他方本質は実存に依つて現実態になる。従つて認識は智性と事物の適合の結果であるが、斯かる本質に関する適合一致とても両者の存在する「存在者」即ち実存に依つて始めて現実性を獲得するに至るのである。

却説、実存と本質とが同一ならざる眼前的存在に於いて、吾々は或ものが生成・滅失し、其結果実存したり、しなかつたりする事を知つてゐる。然し一切のものが、実存と本質とが別のものとして実存するものである偶存有 ens contingens

である事は不可能である。もし可能とすれば、偶存有は実存せざるイデアの総和となつてしまうからである。しかも偶存有は眼前的存在として在る。従つて自らに依つて必存的である所の或物即ち実存と本質とが同一な、実存そのものたる必存有 ens necessarium が当然なくてはならない。(S., Th., 1. Q., 2, a., 3, c)

こゝからして人間智性の認識は、その原因として

1 認識された事物と人間智性との偶然的 per accidens 適合としての真理（智性の真理）

2 必存有である神の智性と事物との必然的 per se 適合としての真理（事物の真理）

3 実存と智性との間に完全なる同一性が存する必存有たる神に於ける事物と智性との適合そのものとしての真理（第一真理）

を有する事が因果律に依つて分明となる。而して第一真理は事物の真理、智性の真理が依つて以つて真理を分有させられる所の、実存そのものたる神の属性として transcendentalia なのである。事物と智性の適合としての真理は、従つて、単に人間智性に於ける論理的真理 veritas logica に止まり得ず、存在諸領域に類比的真理として存する形而上学的真理 veritas metaphysica でなくてはならない。

トーマスに於いて認識は、事物と智性との適合として表わされる智性の真理の結果であつてみれば、トーマス的な存在論的認識論に占める真理論の試金石的性格は、いくら強調しても強調し過ぎる事はない。